

安楽寺寺報

聞光

第75号  
降誕会号  
2015/5/21

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町2-28  
安楽寺  
0823-21-7561

ほんとうのいのち

信楽晃仁

四月、新入園児を迎え、ひかり幼稚園の新学期が始まりました。今年は泣く子どもも少なく、落ち着いたスタートでした。そんな新学期が始まったある日、年長さんが、ひかり幼稚園の畑、ひかり菜園に行きました。というのも、この新緑の時期、木々だけではなく、元気な草がいっぱいで、ちよつと目を離すと、ひかり菜園に、草ばかりが元気に育ちます。その対策に、子どもたちが、草取りに行ってくれました。



ひかり幼稚園の菜園活動は、子どもたちが、種植から、草取り、収穫といった畑作りを体験します。畑で作物ができるまでには、様々な苦勞と自然と

の関わりがあることを、子どもたちは身をもって知ります。また畑には子ども達の大好きな虫もたくさんいるので、そこは楽しみながら、色々な発見や体験をし、学びを深めます。そのひかり菜園で「さあみんなだ草取りがんばろう」と草取りを始めた時のこと、子どもたちの中からこんなささやきが聞こえてきました。ある女の子が草に向かい「草さん、かわいいそう」と。それを聞いた隣の女の子が「草さん、ごめんね」といいつつ草を抜いているのだそうです。そしてまた、それを聞いていた男の子が「じゃけど、イチゴさんが元気に育つためには草はぬかにやいけんのんよ」といって、草を抜くのだそうです。先生がこの子どもたちのやりとりに感動したと、報告してくれました。

ひかり幼稚園では「まことの保育」という浄土真宗の教えによる幼児教育を実践しています。それはお釈迦さまから親鸞聖人に受け継がれた、本當のいのちに目覚める教えです。戦後六五年間ひかり幼稚園はその命

の教育をすることで、子ども達のひかり輝く未来と、平和な社会が実現できるのだと考えてきました。それがこの子どもたちの会話をきき、あらためて、私の中でもはつきりとしたように思います。

**一枚の写真**

信楽 慧

この写真、どこかおわかりになりますか。テレビで見られた方も多いのではないかと思います。三月に大学の卒業旅行で北海道に行ってきました。この写真は、昨年話題になりましたNHKの連続テレビ小説「マッサン」に出てくる余市にあるニツカウキスキー工場の中の樽の写真です。当日は雪が降っていましたが、とてもいい所でした。あつという間の大学時代でした。



もう大学を卒業する歳になったことを思うと感慨深いものがあります。ぼくはもう少し大学に残って、大学院で勉強を続けますが、卒業し就職する友達もいます。大学の友達は一生涯の友達になると思うので、またいつか同じメンバーで旅行に行けるようになってほしいなと思ってきました。ぼくも少しお酒をたしなむようになり、人並みには飲めるようになりましたが、ウィスキーはなかなか難しく、もう少し修行が必要ですね。

安楽寺マンガ通信

その28 信楽めぐみ作

縁(えにし) 信楽徳子

ゴールデンウィーク真只中。教え子の結婚式があり、ご招待をいただき出席いたしました。教え子といっても二十数年前、私が幼稚園の年長組の担任をした時、同じクラスにいた男の子と女の子の結婚でした。



5000名近くのひかり幼稚園の卒園生、65年の歴史の中でも、同じクラスメートだった子が結婚するというのは、ひかり幼稚園初まって以来のことではないかと思えます。その歴史的瞬間を目撃できる一通の招待状をいただいてからは、とにかく楽しみで、楽しみで、待ち遠しかったことです。

結婚式で二人の姿を見たとき、幼い時の面影が思わずよみがえってきました。あんなに小さかった男の子と女の子が、まさか幼稚園の時から付き合ってたなんてことはありませんから、数十年たって、またこんなご縁があるなんて誰が思うでしょうか。深い深い縁(えにし)を思わずにはおれません。

人生の先輩として、このご縁を大切に、共に仲良く、幸多き人生を二人で歩んでくれることを願わずにはおれません。



「世界で影響力のある百人」に「人生がときめく片づけの魔法」で有名な近藤麻理恵さんが選ばれました

この方が何故選出されたかという片づけを通して日本人の美学

引き算の美学

物を大切にすると美学

が評価されたからです。

日本人の美德が評価されたわけですが、現在日本では

食べ残しの量は年間2189万トン



ゴミの排出量はヨーロッパの10倍以上です



これを機会に日々の生活を見直してほしいです。  
日本人に「日本人としての美学」を思い出ししてほしいです

信楽峻磨前任職大谷本廟納骨

3月29日、大谷本廟へ前任職の納骨に参りました。前任職は心より親鸞さまを慕っておりましたので、安楽寺の無量寿堂納骨だけでなく、祖壇納骨で明著堂にも分骨し、親鸞さまのおそばに納骨させていただきました。親鸞さまは倶会一処の教えを「かならずかならず一つところへまわりあふべく候ふ」とお手紙に書かれました。前任職も親鸞さまとも、また懐かしい家族とも相まみえていたことだと思います。大谷本廟にお参り際には、是非明著堂にもお参り下さい。



編集後記  
先日朝日新聞に「匠の美事」が載りました。これは、建築の神髄を追求する人々の姿を、著者が追体験し、その感動を伝えるという、とても素晴らしい記事です。建築は、単なる技術ではなく、文化の結晶です。匠の心遣い、その細やかな気遣いが、建築物に魂を吹き込み、人々を感動させるのです。この記事を讀んで、私も建築の世界に興味をもちました。大谷本廟の建築も、その美しさと歴史が、多くの人々を魅了しています。これからも、建築の世界を、深く掘り下げたいと思います。



# お念仏のしずく

「ほんとうの宗教」

本当の宗教とは、たんに生きるための、手段になるのではなく、私自身の生命の根源に深くかかわるのです。だから、それはあってもなくてもよい、しかしあつたほうがよい、というものではありません。そうではなくて、それなくしては、真実の生命を生きたれない、というものです。それに出あうことを通して、自分が生きていることの確かな手ごたえを感じ、その生命が真実にふれているという深い実感をおぼえることのできるものこそ、本当の宗教なのです。たった一度だけの人生を、本当に手ごたえのある真実の人生として生きるのか、それとも、ついにそういう深い充実感も持ち得ないまま、ついにむなしく終わってゆくか、という分水嶺となるものが、この宗教なのです。

真宗とは、このような本当の宗教であります。したがって、真宗を学



皆さんは先祖や家族の命日をお勤めされることだと思いません。その命日は、亡くなった日のことです。死んだ日のことなのに命の日というのです。疑問に思われたことはないですか。これは死に目を向けなければ本当のいのちは見えてこないという、仏教の教えだと思いません。身内の死にあうとき、普段見すごしている本当の命に目覚めることができるのだというのです。

命とは言い換えれば生死です。生きていくことだけではありません。死ぬものが命なのです。生死のどちらが抜けても命とは言いません。ところが私たちは生にしか目を向けません。生きることが全てで、生きていくことにしか意味がなく、生が命だと思ひ、死は無意味と切り捨て、身内の葬式も法事もしなくなりつつあります。こうやって死を見なくなり、死に触れる事がなくなつて、命が見失われるのです。

私はこの子達のつばやきは、草取りの中から、草の死を見たのだと思うのです。草抜きは草を死に至らしめることと自覚することで、草のい

のちに気づいたのです。私たちが大人は草は生きていることは知っています。草の死のことに思いが至りません。草の命に気づいていないのだと思います。だから草を抜いても、何ら罪の意識も、草への哀れみもありません。まるで草は抜かれて当たり前で、命をとつていると言う意識も全くありません。これは草だけの話ではありません。「誰でも良かった。人を殺してみたら良かった」近年何度この言葉を聞いたことでしょうか。その度に、大騒ぎとなり、テレビでは識者が集まってその原因や対策が論議されますが、本当にその原因がわかり、その対策はできたのでしょうか。命を見失うことで、殺すという自覚はなくなり、殺す。それは草でも動物でも人間でも同じではないかと思うのです。私たちの日常にはいくらでもいのちを学ぶ機会があります。特別なことではありません。自然と向き合い

少し目をこらせば、この度のような畑にも、あるいは食卓にも、日常生活の中にもいくらかでも生死を見つけたことができます。その死に目を向けた時、本当の意味でのいのちが見えてくるのだと思います。

念仏は生死を包み込んだ言葉です。「いただきます」も生死を含んだ言葉です。命日も生死を含んでいます。こうした仏教の教えが伝えた日常の作法がいのちを伝えて来たのです。まさしくこれが前住職のいつた「もの」と「こと」の話し(遺稿集等参照)だと思ふのです。私たちが現代人は頭でつかちになり言葉で分かたつたものになっていくだけで、私たちが命と言っている「もの」は、一般論であり名詞であり、概念です。「命を大切に」とか、「命は地球より重い」とか口では言っているが、その命が何であるのか、具体的にはわからずに、口だけで「命は大切」といつているだけです。



そのいのちを概念ではなく、主体的にどう自覚し、本当のいのちに向き合うのかということ。それが様々な場面で、体験を通して命の本質である生死に気づくことだと思ふのです。人間は死と向き合うことで、いのちに目覚めるのだと思います。

科学の発達により、私たちは科学が幸せを実現してくれると思ひ込んでいます。確かに科学は私たちの生活を便利に、快適に、そして私たちの思うようにしてきましたが、その欲望の充足の裏に、次々といのちの問題を生み出しています。いよいよ命という「もの」で見るとは、生死という、生きる「こと」死ぬ「こと」を通して、いのちへの眼差しを深めていなくてはなりません。この度そのことを子ども達も教えてくれたように思います。

お釈迦様は「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。」(ダンマパダ)と、いのちへの眼差しを教えてくださっています。大切にたたねばならない教えです。



ぶについては、それが自分の人生にとって、何か役に立つだろう、と言う思いをもって求められてはなりません。そうではなくて、私自身はいつたい何のために生まれてきたのか、そして今何のために生きているのか、ということ、徹底して問うということを通してこそ学ばねばなりません。そこに真実の生命を生きたる道を見つけてゆくの、真宗の念仏の教えなのです。

『この道をゆく』

※今号より『お念仏のしずく』の中から、前住職著作書籍の原文に当たり学びを深めたいと思ひます。題字は前住職が揮毫したものです。似顔絵は門下生の竹林寺俊人さんが書かれました。

## 安楽寺法要案内

六月	永代経	日時 6月13日(土)・14日(日) 両日とも朝席・昼席 講師 岡山 浄福寺 山下義円師 講題 「救われる」とは どうしたことなのか
七月	安居会	日時 7月11日(土) 講師 吳 西教寺 岩崎智寧師 講題 信楽峻庵師に学ぶ「念仏」
八月	歡喜会	日時 8月13日(木)・14日(金) 両日10:00~11:00 講師 住職自勤 講題 先祖を訪ねる
九月	一周忌・彼岸会	信楽峻庵前任職一周忌(彼岸会) 日時 9月26日(土) 昼席 講師 龍谷大学教授 鍋島直樹師 講題 限りなきいのち 『お念仏のしずく』を頂いて



暮らしの中の仏教語  
「会釈」(えしゃく)

普通ちよつと頭を下げて、軽くおじぎをすることを「会釈をする」といいます。

しかし本当は、もつと深い意味があります。仏教の教えは、大変広いものなので、その中には、一件矛盾しているように思われる教えがあります。その時、それらの相違点を掘り下げ、その根本にある、実は矛盾しない真実の意味を明らかにすることを、会釈と

そのからです。あれこれ思い合わせて、納得できるような解釈を加えることや、色々な方面に気を配ること、儀礼にかなった対応などを経て、今のようになつたのだと考えられています。

確かに煩惱即菩提とか、生死即涅槃、自他一如、生死一如といった、矛盾する言葉が多いのに気がつきません。その奥に深い深い思慮があるのだと思ふと、注意深く聞いていかななくてはならないことと思ひます。